過越の食事を共にする（最後の晩餐）

ルカ福音書22:7-23
（新改訳2017訳）

22:7 過越の子羊が屠(ほふ)られる、種なしパンの祭りの日が来た。
22:8 イエスは、「過越の食事ができるように、行って用意をしなさい」と言って、ペテロとヨハネを遣わされた。
22:9 彼らがイエスに、「どこに用意しましょうか」と言うと、
22:10 イエスは言われた。「いいですか。都に入ると、水がめを運んでいる人に会います。その人が入る家までついて行きなさい。
22:11 そして、その家の主人に、『弟子たちと一緒に過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っております』と言いなさい。
22:12 すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこに用意をしなさい。」
22:13 彼らが行ってみると、イエスが言われたとおりであった。それで、彼らは過越の用意をした。
22:14 その時刻が来て、イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。
22:15 イエスは彼らに言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をすることを、切に願っていました。
22:16 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません。」
22:17 そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげてから言われた。「これを取り、互いの間で分けて飲みなさい。
22:18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」
22:19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」
22:20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。
22:21 しかし見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓の上にあります。
22:22 人の子は、定められたとおり去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。」
22:23 そこで弟子たちは、自分たちのうちのだれが、そんなことをしようとしているのかと、互いに議論をし始めた。

【祈りながら考えよう】

（１）神が私たちに命じられることは、旧約時代と新約時代とではどう違いますか。
（２）主イエスが十字架で死ぬ前に、弟子たちと過越の食事をすることを切に願っていたのはなぜですか。
（３）イエスを裏切ったユダは、どうしてペテロのように救われなかったのですか。

【解　説】

（１）過越の食事の準備

過越の祭りとはどういう祭りか、その出所(でどころ)は出エジプト記12章にある。《イエスは、「過越の食事ができるように、行って用意をしなさい」と言って、ペテロとヨハネを遣わされた。》

彼らがイエスに、「どこに用意しましょうか」と言うと、イエスは言われた。「いいですか。都に入ると、水がめを運んでいる人に会います。その人が入る家までついて行きなさい。そして、その家の主人に、『弟子たちと一緒に過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っております』と言いなさい。すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこに用意をしなさい。」》

イエスが使いを遣わすという場合には、たいてい２人をお遣わしになるのが常であった。19章で、エルサレム入城の時に、子ろばの調達のために弟子をお遣わしになった場合も、２人を遣わしておられる（19:29）。ここでは、ペテロとヨハネの２人が使いとして遣わされた。そして食事ができるように準備をしなさいと、命令された。

ここで私たちが学ぶことは、イエスが弟子たちに何かを命じられる時には、子ろばの調達の時もそうであるが、その命令は、行けばもうすでにそうなるように整えられているということである。

人が人に命令する時には、人は、ただ命令するだけである。それを命令された者がそのように一生懸命やって、その命令に応じる。命令されたように自分がしなければならない。

しかし、神が私たちに命じなさる場合は、命令されていることはすべて神の方でそうなるようにすでに整えた上で、命じられる。これが新約時代における神の命令とその命令に従う者の原則である。ここの所を間違えてはいけない。

旧約時代の神の命令は「律法の原則」であり、その律法の命令を全(まつと)うできる者は1人もいなかった。

（２）イエスの命令

エルサレムに自分の家を持っていない、地方から上って来た者たちは、エルサレムの市内のどこかに、過越の食事をする席を手に入れなければならない。イエス様とその一行も、だれもエルサレムに自分の家など持っていない。だからそういう場所を見つけることはなかなか難しいことである。

しかし、今読んだ所で分かるように、ペテロとヨハネは何も分別しないで、ただイエスが言われた通りにして行けばよかった。自分ですることと言えば、イエスが命じられたように行動すればいい。そうすれば、もうそこに事は成っている。イエスの方でもう道はつけておられる。ただ弟子たちは行って、その事実を見ればいい。それが、主が弟子たちに命じられる命令である。少しも難しくない。《彼らが行ってみると、イエスが言われたとおりであった。それで、彼らは過越の用意をした。》

（３）過越の小羊なるイエス

《その時刻が来て、イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。》

①過越の食事

ユダヤの１日は日没(にちぼつ)をもって始まる。過越の食事は日没(にちぼつ)と共に行われる。

その整えられた二階の座敷は、マルコの母の家であったと考えられる。

食卓に着く着き方は、真ん中に食卓があり、その周りを囲んで寝台がある。その１つの寝台に３人ずつ、皆足を伸ばして、左肘(ひだりひじ)をついて長々と横たわる。それがユダヤでの正式な食卓の着き方である。

《イエスは彼らに言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をすることを、切に願っていました》。

イエスが死ぬことは予測されていた。その死ぬ前に、弟子たちと一緒に、この過越の食事をすることを、切に願っていたと言われる。それはなぜか。

②切に願っていた理由

過越の小羊をほふり、これを食するということと、イエスの十字架の死と「つながり」があることを、イエスは弟子たちに教え、悟(さと)らせたかった。

イエスが十字架にかかって血を流される出来事は、自分自身が神の前に「ほふられる小羊」として、「犠牲の供え物」として十字架の上に流される血潮において、神の刑罰が人類の上から過ぎ去っていく。神の災いは、このイエスの血によって過ぎ越す。その出来事としてイエスはご自分の死をはっきりと予測しておられた。過越の祭りは、イエスの十字架の死を予表する出来事であった。

どんな人であっても、イエスの流された血潮はわが罪のためと信じて、このイエスの血の陰に隠れる者、すなわちイエスを信じ、イエスに頼む者の上には、神の刑罰は下らない。災いは完全にその前を過ぎ越す。イエスが十字架で流された血潮は、まさにこの過越の小羊の血であった。

バプテスマのヨハネがイエスを指差して、民衆に証言している言葉がある。ヨハネ福音書１章29節、

《その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊》、また
《そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。》（ヨハネ1:36）

と言っている。ヨハネの黙示録でも、この小羊という言葉がたくさん出てくる。すべてキリストを指している。

（４）神の国での大餐宴(だいさんえん)

《あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません」》

「過越が神の国で成就する時」といえば、神の国が実現して、人間の救いが完成する時である。その時はいつか。イエスが再臨される時、この世が終わる時である。そこに新しい神の国（千年王国）が実現する。

イエスは言われる。《過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません》ということは、その過越が成就する時、神の国が実現する時、盛大な神の国の大餐宴(たいさんえん)がもたれるということである。

マルコ福音書14章25節を見ると、

《まことに、あなたがたに言います。神の国で新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、もはや決してありません》とある。この世では経験出来ない、もっとすばらしい大餐宴(たいさんえん)がもたれる。心底から喜び、神の栄光をほめたたえる盛大な餐宴(さんえん)である。その時まで、わたしはぶどうの実からできた物を飲まないと、イエスは語られた。その神の国実現の時こそ、新しく飲むのである。

《神の国で新しく飲むその日まで》という「神の国における新しい飲み物」は、この不完全な損(そこ)なわれた体をもって

飲む飲み物ではない。イエスと同じ復活体にあずかった、もはや死ぬことのない永遠の霊の体を与えられた者たちがイエスを中心にして持つ餐宴である。それはこの地上の古びて腐るような飲み物や食べ物とは質が異なる。永遠の体にふさわしい、復活の体にふさわしい飲み物、食べ物である。

（５）十字架で裂かれたイエスの体

《あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」》。

さらに、パンを取って弟子たちに分けられた。７節に《過越の子羊が屠られる、種なしパンの祭りの日が来た》とある。普通は粉にふくらし粉を入れて発酵させ、そしてパンを焼くが、この祭りの時には、パン種を入れないで、ただ粉をこねて焼くだけである。固いパンである。

この種なしパンはイエスの体を象徴するもの。イエスは十字架にかかってこの体の肉を裂かれた。あの打ち込まれた釘によって、わき腹に兵卒が突き刺した槍で、イエスの体は裂かれた。イエスの体こそ、すべての人の救いのために分け与えられる命のパンであった。

（６）イエスの血による契約

《食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です》

旧約、すなわち古い約束、キリスト以前の約束は、シナイ山においてモーセに与えられた律法である。これを行え、そうすれば生きることができる。この律法によって、神は人と契約をお立てになった。しかし、人間は律法によって救われることはできない。律法は、１から10まで人間が行わなければならない。しかし、人間はこれを行う力がない。律法によって、人間は神の刑罰につぶされてしまうしかない、どうしようもない罪人であることを知るほかなかった。

そこで神の御子イエス・キリストによって新しい契約が与えられた。神の御子が十字架で血を流し、人間の受けるべき刑罰を聖き身に全部引き受けて、代わって十字架に死ぬという出来事があった。その出来事をもって、神はこのキリストの血で、新しい契約を私たち人間と立てて下さった。

「この血は私の罪のために流された血潮である」と、イエスを信じる者は、完全にその罪を赦され、救われるという、新しい血による契約が立てられた。これが新しい契約（新約）である。

（７）救いはイエスの血潮にあり

イエス・キリストを信じる者は、神の子とされている。来たるべき神の国は信じる者への祝福である。これは血によって立てられた、この契約を信じる者の確信である。自分の行いなどは一切問題ではない。

律法か福音か、旧約か新約か、この関係をはっきり説明しているものが、ガラテヤ人への手紙である。律法の道には救いはない。ただ信仰の道こそ完全な救いの道である。イエスはその道となって下さった。

私はどんなに破れ果ててもいい。私の救いはイエスにある。イエスが流されたあの血潮にある。これがイエスを信じるということである。そこに私たちの大安心がある。立っても転んでも、失敗しようと成功しようと、私たちの変わらない大安心は、ここにある。

（８）イエスの肉を食べ、血を飲むこと

イエスがご自分の肉をパンにたとえ、ご自分の血をぶどう酒にたとえて、これを食し、これを飲めと語られたことは、ヨハネ福音書６章でイエスが語られている。ヨハネ6章55節から、

《わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」》

イエスを信じるということは、イエスの肉を食すること、イエスの血を飲むこと。この体がご飯を食べ、それで生きていくように、私たちの永遠のいのちは、イエスなしには生きられない。そのようにイエスを信じ、イエスの御言葉を日々の糧として、この御言葉によって生きていく。これはイエスの肉を食し、血を飲むことである。

これは霊的に受け取らなければ分からない。この時、多くの弟子たちがこの言葉につまずいた。イエスの教えを信じるというなら分かるが、イエスの肉を食し、血を飲む、そんなことは受け入れられないと。ヨハネ6章60節に、

《これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言った。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。」》

弟子たちのうちの多くの者がつぶやき、離れ去ってしまった。ヨハネ6章63節から、

《いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。けれども、あなたがたの中に信じない者たちがいます。」信じない者たちがだれか、ご自分を裏切る者がだれか、イエスは初めから知っておられたのである。そしてイエスは言われた。「ですから、わたしはあなたがたに、『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのです。」こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった。》

一番肝心な言葉で、多くの弟子たちが大水が引くように離れ去った。残ったのは十二人の弟子だけだった。

（９）イエスを裏切る者

最後の晩餐で、イエスはご自分の体、ご自分の血について言われた後で、食卓に手を置いている者の中に、わたしを裏切る者がいると言われた。その瞬間、弟子たちの中に大きな動揺が起こった。

みんな心配そうにイエスに尋ねた。まさか、私ではないでしょうねと。自信がない。確信がない。しかし、イスカリオテのユダは、まさか、私ではないでしょうと言う時には、本当に冷静で、心配そうな顔つきなど全然ない。彼には彼の確信があった。彼にとっては、イエスを売るということはいいことに思えていた。そのように自分に思わせていた。

ユダの心に、イエスに対する強い批判が起こり始めたのは、ヨハネ福音書6章の、わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠に生きると言われ、そこで多くの弟子たちが去ってしまったという、その時である。

イエスは12人の弟子に対しても、あなたがたも去ろうとするのかと言われた。ペテロは、いいえ、あなたから離れてどこへ行きましょうと答えた。その時イエスが、「わたしがあなたが十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です」と語られた。ユダは他の弟子たちと一緒にイエスのもとから離れ去っては行かなかったが、その心にイエスに対する疑いが、批判が強く起こり始めたということは確かである。

ユダの心をいち早く見て取られたイエスが、わたしは十二人を選んだが、あなたがたのうちの一人は悪魔だとはっきり語られた。それは、その瞬間にユダの心を変えようとなさってのことであろう。

もしユダがそのイエスの御心に応えることが出来たら、自分の心の中に起こるその出来事を、すでにイエスは見ておられるということで、イエスを信頼する方へいけばよかった。他の弟子たちならそのようにしただろうが、ユダは頑固であった、傲慢だった。

どこまでも自分の考えを固持してやまない存在であった。だからそういうふうに言われても、イエスを信頼する方へいかないで、その批判を自分の中に深めていった。「私はこんな事を思っている」と、他の仲間に相談もせず、イエスにも打ち明けないで、どこまでも自分の心の内に深めていった。悪魔が人の心を握っていく常套手段である。

（10）悪魔にとらわれた心

悪魔は闇の王者である。自分の心を明るみに出すことを嫌う。悪魔に捕らわれている心は、明るみに出すことを嫌う、自分の内に深めていく。これが命取りになる。私たちが気を付けなければならないのは、この一点である。

疑いも起こる、いろいろな批判も起こる、神に対し、イエスに対しても、仲間関係においてもいろいろな思いが起こる。それをユダのように自分の心の内に深く秘めていくか。

何か疑いが起こった時、ただちにそれを明るみに出していく。それによって悪魔の手から離れられる。それが間違った批判なら、必ずその事が正される。しかし、ユダは自分の心の奥深くに保っていった。そして、ベタニアのマリアがナルドの香油一斤をイエスの頭に注ぐというあの出来事によって、決定的なものになってしまった。

（11）神に対し罪を認める者の幸い

①ユダとペテロの違い

主イエスが十字架についてからでも、ユダは帰ってくればよかった。悔い改めの機会はあった。イエスの血潮したたる十字架のもとに身を投げ出して、本当に悪うございました、間違っておりましたと、自分の間違いを悔い改めたら、そこでユダは、だれよりも恵まれた救われた者になったであろう。

しかしユダは、自分がとんでもないことをしたと気がつき、銀貨30枚を祭司の所に返しには行ったが、イエスの所に悔い改めて帰ることをしなかった。

自分に対して悔やんだ。主に対して悔い改めたのではなく、自分に対して悔やんだ。取り返しのつかない自分を責め、自分を悔やみ、その苦しさのあまり首をくくって死ぬという、さらに永遠に取り返しのつかない地獄のどん底に落ちていった。ユダの問題は、裏切ったあの出来事そのものよりも、最後まで自分を固く持ち続けていった頑なさにある。

ペテロも３度までイエスを否定するという裏切りをした。しかし、彼はイエスに向かって泣いた。ユダは自分に向かって悔やんだ。そこに天国と地獄の違いがあった。神に向かって自分の罪を認めて頭を下げていく、そこに救いがある。

他の弟子たちは憂いながら、動揺しながら、確信がなくて、まさか私ではないでしょうねと言わなければならなかったその弱さを弱さのまま表し、うろたえをうろたえのままに、イエスの前に表していった。だから彼らは1人も裏切り者にはならなかった。みんな救われて、すばらしい祝福を受けていった。

②自分の心の問題を明るみに出す

私たちに必要なのは、強さとか頑張りではない。弱いままを、無いままを、出来ないままを、うろたえのままを、不安のままを、そのままにイエスの前に出していくことである。

イエスは、とことんまで私たちの弱さのために、代わって十字架に死んで下さった。その罪を担って死んで下さった。だから私たちはいくら弱くてもいいのである。いくらうろたえるものであってもいい。イエスがそこに救い主としていて下さる。それをそのままに表していくことが大切である。そこにイエスの救いがある。

平然と、自分の心を抑えてうろたえを外に表さない、心を外に現さない、自分の本当の姿を外に現さない、これが最も（くせもの）である。この世では、それがいいとされるかもしれない。そこを間違えないようにしたい。

信仰の世界においては、あるがままを、そのまま明るみに出していく、そこに完全な救いがある。悪魔は光を嫌う。明るみに出す時、イエスの救いとなる。大きな平安となる。ユダの強がり、それはまことに命取りである。